

〇〇寺様〇〇法座「釈迦弥陀は慈悲の父母」〇月〇日〇座
琵琶説法 「雪山童子」の段

「色は匂えど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ
有為の奥山今日越えて 浅き夢見じ酔ひもせず」

釈迦成仏のもととなる過去世の修行、インドではジャータカと呼ぶ物語。生死輪廻のその中で、無量の功德積み重ね、その甲斐あって世に出て釈迦牟尼仏と示してぞ、無上のさとり開きます。

ジャータカは、釈迦牟尼仏の前世に限り、ボーディサッタと呼ばれました。数ある話のその中で、法隆寺なる玉虫の厨子、その側面に描かれたました物語、さればまた、「いろは」の歌のもととなる、雪山童子の物語、語ることは致しましょう。 . . . 中略 . . .



法隆寺蔵玉虫厨子 雪山童子物語

雪山童子は、考えに考えた末、心を定め、羅刹に告げて、

「御身がもしも下の句を歌い終え、私がそれを聞いたなら、我が身体御身の為に施しましょう。」

羅刹答えて、

「お前がまさにその身体、捨てることができるなら、お前の為に下の句を説き述べようぞ。」 . . . 中略 . . .

「全てのものは常ならず、これ生滅の法にして
生滅すでに果てぬれば、心しずまり安らけし」 . . . 後略 . . .